－高等学校の実践－

支援が必要な生徒に対応する
特別支援教育コーディネーターの取組

本校は、３学年２４クラス、全校生徒約８２０名の全日制普通科の高等学校である。文科系・体育系のクラブとも盛んに活動しており、毎年多数のクラブが全国大会に出場している。また、普通科は２年次より文系と理系に分かれ、進路希望に応じたきめ細やかな指導が行われている。

昨年度まで、個々の生徒の状況に応じて、人権・生徒指導・教育相談に関する３部門のプロジェクト会議を設置し、様々なケースに対応してきた。専門機関と関わりがある生徒が入学したこともあり、平成１９年度からは教育相談を含む特別支援教育プロジェクト会議を設置し、個々の生徒に対応している。

１　特別支援教育コーディネーターの役割

(1)　特別支援教育プロジェクト会議の運営

校長・教頭・担任・特別支援教育コーディネーター・養護教諭・関係教員で構成されている。現在は不定期でプロジェクト会議を実施しているが、生徒の状況に応じて会議の開催を調整している。

(2)　専門機関との連携

現在、専門機関と関わりのある生徒が在籍しており、校内の窓口として特別支援教育コーディネーターが連絡・調整を行っている。

(3)　特別支援教育コーディネーター研修への参加

(4)　特別支援教育に関する研修の広報

(5)　校内研修会の実施と研修会報告

高等学校では特別支援教育についてある程度認知されていると思われる。しかし、小・中学校と比較するとまだまだ浸透しているとは言えない。校内において一層の研修参加と啓発に取り組む必要性を感じている。

(6)　特別な教育的支援が必要な生徒の把握

(7)　個別の支援や指導についての助言

学校生活の中で、特に問題行動を起こした生徒とその保護者への対応の際に、助言をする場合がある。学力はある程度あるが、対人関係が苦手な生徒が多くなっている印象を受けている。

(8)　スクールカウンセラーとの連携

本校では、毎週月曜日にスクールカウンセラーが来校されるので、支援が必要な生徒について定期的に助言をしていただいている。

２　生徒Ａへの取組

(1)　**学級の実態**

Ａの在籍しているクラスは、国公立大学への進学を希望している生徒が集まっている。他のクラスより数学・英語を合わせて２単位多く履修し、木曜日以外は７時間授業である。春に学習合

宿を行ったり、長期休業中の補習に全員が参加したり、大学進学に対して意識の高い生徒が多い。クラスの雰囲気は男子が多く、にぎやかで体育祭や文化祭、合唱祭などの行事も積極的に取り組んでいる。Ａのことについては、「時々変わった言動をする生徒」という受け止め方をしているが、疎外するようなことはない。

⑵　**生徒の実態**

・　学習場面で困るようなことは特に無いが、こつこつと取り組むような課題は大変苦手である。また、提出物について期限を守って提出するということがなかなかできない。
・　基礎的な学力はあり、模擬試験の成績は校内では上位に位置している。
・　連絡の無い欠席や遅刻があり、基本的な生活習慣が定着できていない。
・　クラスの生徒との関わり方でＡ自身が戸惑う場面があり、対人的なスキルが身に付いていない。
・　学校や家庭で生活するうえで枠（ルール）を設けておかないと、自分をコントロールできず問題行動を起こしてしまう場合がある。

⑶　**支援の経過**

・　入学後、学年主任と担任が専門機関を訪問し、情報交換を行った。
・　昨年度の年末に問題行動を起こし、Ａへの対応について専門機関と協議した。
・　今年度、担任と特別支援教育コーディネーターが専門機関を訪問し、情報交換を行った。

⑷　**Ａへの支援**

昨年度の年末に問題行動を起こした後、教室ではなく別室で過ごすことになった。自らスケジュール管理ができないＡに対して、教科担任による学習指導と自習のスケジュールを一緒に立てていき、計画的に学校生活を送られるよう支援した。その間、管理職、生徒指導部、教育相談係、担任が中心となり、プロジェクト会議を開き、Ａを教室に戻すための支援方法について協議した。

Ａと面談をする中で、クラスの友人との関係について課題があり、対人的なスキルが身に付いていないことがあらためて分かった。具体的には、相手との距離感がつかめず、必要以上に身体的な接触が多かったり、集団の輪の中に突然入っていったりといった行動が見られた。そのため、実際の場面を想定して、どのようにクラスの友人と過ごせばいいのか一つ一つシミュレーションしていった。

今年度になり、新クラスで過ごすに当たってＡと面談を持ち、いくつかの枠（ルール）を設定して学校生活を送ることにした。特別支援教育コーディネーターに毎日会いに来ること、面談を週１回定期的に持ち、課題の提出状況やクラスの生徒との関係で困ったことがないか確認していくこと、携帯電話の使用について、学校のルールとは別に枠を設定することなどである。

現在は、大きな問題を起こすことなく学校生活を送ることができている。来年度は、高校卒業とその後の進路に向けて、専門機関との連携を密にしていかなければならないだろう。

３　支援が必要な生徒への対応のポイント

・　生徒の特性に応じたルールづくり
・　特別支援教育コーディネーターと本人との定期的な面談
・　管理職や特別支援教育コーディネーターが中心となり、支援が必要な生徒に関わっていく校内支援体制の整備。
・　高校卒業後の進路に向けての専門機関との連携